

《第6回国際シンポジウム報告3》

## フランスにおける日本美術史研究の起源と 発展についての一考察

ロール・シュワルツ＝アレナレス\*

「フランスにおける日本美術史研究」というテーマは非常に大きく、多様な問題を孕んでいるが、19世紀後半から発達したフランスにおける美術史研究の誕生が、東洋の文化・言語の研究に関するフランスの豊かな伝統と、西洋へ向かって開かれ始めた日本の美術品や絵画との出会いによってもたらされたものであるということに、特に着目したい。事実、日本学の他の分野と違い、「美術史研究」という分野においては、文献などの研究のほか、美術作品そのものを観察する目を鍛錬することが重要となってくる。

ところで、フランスが日本美術史研究の分野に決定的なてこ入れをはじめていた初期の頃から、文学作品、翻訳、社会学、歴史学、哲学、民俗学、図像研究や仏教研究といった分野で、フランスの日本学者たちはその研究の豊かさ、新しさにおいて他より秀でていたが、日本美術、特に古い時代の美術は、一般的ないくつかの作品や、展覧会の目録、専門的な研究を除いて、フランスでは非常に稀な研究対象にすぎなかった。

そこでまず、フランスにおける日本学の3人の先駆者の活躍を見ながら、とりわけこの国の美術史の起源とその存在条件に着目しつつ、その発展の理由を理解し、フランスにおけるこの分野の新たな飛躍をもたらし得る、新しいアプローチを探りたいと思う。

### I. 「日本学」まだ存在しなかった時代

まず最初に、一般的にフランスにおける日本学は、世界の中で最も早くから存在していたが、フランスの東洋研究の歴史においては、随分後になってからしか確立されなかったということを出したい。19世紀末以前には日本学はまだ生まれていなかったが、中近東の言語や東洋文化に対する関心は、17世紀に最初の教育機関が出現しているという事実が示す通り、もっと早くからヨーロッパやフランスに存在していた。

実際、東洋文化研究に関するフランスの最初の先駆者は、かなり昔に遡る。16世紀、フランソワ1世(François I)はギョーム・ビュデ(Guillaume Budé)に勧められ、とりわけ古典と東洋諸言語の教育を目的として、現在のコレージュ・ド・フランスの前身である王立学院(Collège Royal)の設立を創案する。

次の世紀になると、1669年に、東洋の領土、特にオスマン帝国におけるフランスの勢力拡大を第1の目的としていた宰相コルベール(Colbert)は、東洋の言語を学ばせるための最初の学校を設立した。実際、フランスがオスマン帝国とベルシャ帝国内の様々な国との間に築いていた外交的、商業的關係上、当時レヴァント地方で使われていた三つの言葉、すなわちトルコ語、アラブ語、ベルシャ語を使いこなせる、通称“drogman”(通訳官)と呼ばれる官吏は、大使館などでの通訳のために必要と考えられていた。

\*お茶の水女子大学比較日本学センター助教授

続いて1700年、ルイ14世は、東洋の12人の若いキリスト教者を招き、パリの Louis le Grand 学院で学ばせるよう命令を発する。この措置は思ったような成果を出せず、オルレアン公フィリップ (Philippe d'Orléans) は1721年、レヴァントの drogman や交渉人の息子の中から10人の見習い通訳を募り、Louis le Grand 学院附属の若者のための語学学校 (“Ecole des jeunes de Langues”) で学ばせた後、イスタンブールに送ることを決めた。このように18世紀初頭のパリには、東洋と西洋の若者のための、真の交流機関が存在したと言える。

しかしながら、1795年3月30日の勅令によって設立された、現在のフランス国立東洋言語文化研究所の前身である東洋言語学校の創立を先導したのは、王立学院で学問を終えたルイ＝ラングレス (Louis Langlès) であった。最初の条項では、「死んだ」言語ではなく「生きた」言語、つまり政治的、商業的交流に有用な言語を教育することを目的とした。それらの言語とは、トルコ語、トルコ＝タタール語、ペルシャ語、マライ語であった。学校の設立者にとっては、中国語や日本語はまだ実用的な教育の対象になるほどまでに、十分研究なされていなかった。

こうして19世紀の始めになると、パリは二つの学校を擁し、ヨーロッパにおける東洋研究のまさに中心地となる。それぞれ相互に補完的な二つの役割をもったこの二つの学校とは、上述したように1795年に設立され、商業的、外交的交流を目的とする東洋の「生きた」言語を専門とする東洋現代語学校 (École spéciale des Langues orientales vivantes) と、ヘブライ語、カルデラ語、シリア語、アラブ語、トルコ語、ペルシャ語、中国語、満州語などによる文学の教育を目的とするフランス王立学院 (Collège Royal de France) であった。

## II. 日本美術史研究の誕生

### A. ジャポニズムの背景

少しテーマから逸れたが、まだ日本学者が現れる前のこうしたフランスの豊かな東洋研究の歴史は、19世紀後半から始まったフランスにおける日本学の誕生、そしてその急激な飛躍を裏付けている。こうした歴史の歩みの中で、東洋の言語の教育に捧げられた安定した制度、そして、活発な学会 (sociétés savantes) こそ、最初に登場する日本学者たちが、知識の交流や発信に都合の良い環境の中で躍進することを可能にしたのである。

フランスにおいて日本学が急速に発展した二つ目の要因として、もちろん日本の「開国」が挙げられる。16世紀から17世紀の間に、フランス側からはイエズス会の宣教師たち、そして日本側からは1617年に伊達政宗がヨーロッパへ派遣した支倉常長によって、日本とフランスの最初の交流がなされたが、こうした断続的な接触ののちに、安定した深い本物の関係が築かれるまでには、1858年のグロ男爵 (Baron Gros) による友好条約と通商条約の調印を待たなければならない。

エジプトに遠征したナポレオン軍が、フランスにおいてエジプトの言語や美術に対する熱烈な関心を引き起こしたように、その1世紀後の19世紀後半、江戸時代末期と明治時代初期の日本にいたフランス人は、フランス国内において日本の文化、特に芸術に対する好奇心を、少しずつ引き起こしていった。

19世紀末、フランスがその東洋研究の学校において、日本研究を本格的に始めようとしていた時、日本の方でも同じく、周知のように開国によって、フランスに対しても新しい行動を取り始める。19世紀末期の日本は、産業や軍の近代化へ向けてフランス人の技術者を呼び、また教師や科学者らも、彼らの知識や技能を伝授す

るよう招聘された。また1808年にはフランス語教育が長崎で始まり、1850年には最初のフランス語の辞書が登場した。余談になるが、昨年大成功を納めた米映画「ラスト・サムライ」は、1867年、幕府軍の再生という任務を負った使節団から日本へ送られた、フランス人の若く才能溢れた将校、またアマチュアのデッサン画家でもあったジュール・ブルネが、実はモデルとなっていることを記しておきたい。

また、このテーマにとっての重要な出来事として、1867年のパリ万博への日本の最初の参加が筆頭に挙げられる。そこで紹介された作品は、量、質ともに、フランス人に驚嘆をもって迎えられ、新しい芸術の到来を突如として告げるものとなる。これがジャポニズムの始まりとなり、その後文学や芸術という広大な分野に深く浸透し、日本とフランスの関係を強めていく。

さて、フランス、そしてヨーロッパにおける日本学の発展へ向けて、様々な点で道が切り開かれた時期で、少し立ち止まることにする。もちろんここでは、19世紀後半、知識人社会や芸術家たちのサークルにおいて、本日のテーマである日本学という分野の歴史に決定的な飛躍をもたらした人物たちの活動、功績の全てを紹介することはできない。15年ほどまえからフランス、日本において行われている、エマニュエル・トロンコワ (Emmanuel Tronquois)、オーギュスト・レスエフ (Auguste Lesouëf)、エドモンド・ゴンクール (Edmont de Goncourt)、ジークフリート・ビング (Siegfried Bing)、アンリ・チェルヌスキ (Henri Cernuschi)、テオドール・デュレ (Théodore Duret)、フィリップ・ピュルティ (Philippe Burty)、ジョルジュ・クレマンソー (Georges Clémenceau)、ラファエル・コラン (Raphaël Collin) といった美術品蒐集家、学者、画家、作家、政治家、日本文化研究者の役割についての貴重な研究によって、フランスにおける日本学の発展の元となった日仏の文化

フランスにおける日本学の3人のパイオニア：



図1 レオン・ド・ロニー

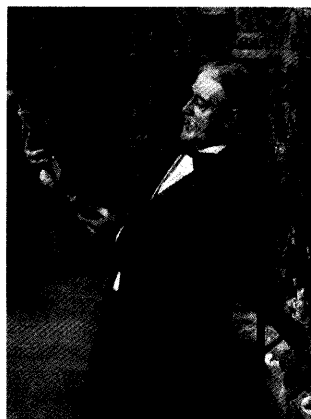


図2 エミール・ギメ



図3 ルイ・ゴンズ  
(ルイ・ゴンズの甥の子供にあたる  
フランソワ・ゴンズ氏所有の写真)

交流の歴史と背景をより正確に把握することが可能となったが、そのうち今日は導入として、レオン・ド・ロニー (Léon de Rosny)、エミール・ギメ (Emile Guimet)、ルイ・ゴンズ (Louis Gonse) の三人の人物を例に挙げ、彼らの行った重要な活動に注目したい。(図1, 2, 3)

20年の間に、当時の政治的、文化的な投資に後押しされ、また多くの芸術愛好家、蒐集家、実業家や、最初の万国展覧会の組織によって支援され、また引き継がれ、この三人の人物は日本美術に関する知識の真の道具をフランスにもたらす。1863年には大学の講座や日本文化普及のための多くの学会が、1879年には世界の宗教美術のための美術館が、そして1883年には日本美術史に関する最初の書物のひとつが、それぞれの人物によって創設、創作される。

彼らそれぞれの仕事の重要性を評価しながら、ここで、この創造に満ちた重要な時代の特徴やその功績について注目し、現在の日本学にどのように継承され、どのような結果を残したかを簡潔にまとめたい。

## B. レオン・ド・ロニーと日本語教育

日本美術史学の発展に必要な知識の道具として重要なものの1つは、やはり書物、また口承による日本文化全体の把握である。上述したように、現代語と古代語の教育に対するフランスの関心とその長い経験、そして西洋に対する日本の「開国」は、19世紀末フランスにおいて東洋諸言語が鳴り響く中、そこに日本語を導入するのに適した環境をつくり出した。そこに一人の先駆者、北フランスのリール郊外出身の若い知識人、レオン・ド・ロニーの出現が、日本語教育の開花を決定的なものにする。

読書好きの家庭に生まれ、父親はその時代には珍しく、日本や中国の書物を備えた立派な図書館を所有していた。彼が生まれた1837年頃は、フランスで手に入る数少ない日本についての資

料は、カトリックの宣教師からもたらされたものであった。また、エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer) (1651-1716) や、カール・ペーテル・ツェンベリ (Carl Peter Thunberg) (1743-1828) のような、長崎の出島に滞在した医師らによる文書も手に入れることができた。こうした文書を知っていたロニーは、それらがヨーロッパでは一番著名だとしつつも、彼にはむしろ博学なドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold) の科学的方法論を高く評価しており、彼の著作の方が気に入っていたようである。

事実、当時まだ若干16歳のロニーが、日本の鎖国時代に長崎の出島に数年滞在していた、収集家でもあった博識なドイツ人医師シーボルトとすでに交流を持っていたということが、1853年に記されたある手紙によって知られている。この手紙の中で、ロニーはシーボルトに対し、彼の著作、特に [*Bibliotheca japonica*] を送って欲しいと頼み、「数年前から日本語の勉強をしている」ことを明言している。

こうした日本文化との最初の接触到刺激を受け、レオン・ド・ロニーは1852年に帝国東洋言語学校 (Ecole impériale et spéciale des langues orientales) に入学する。彼はいくつかの言語を学んだが、1841年に開講された中国語に主に関心を抱いていた。コレージュ・ド・フランスの教授、Stanislas Julien (スタニスラス・ジュリアン) のもと、ロニーは中国語をほぼ習得し、そのことが、のちに彼の日本語の独学を大いに助けることになる。彼はまた、フランス東洋協会 (Société orientale de France) と、アラブ語を専門とする著名な東洋学者、シルベストル・ド・サシー (Silvestre de Sacy) によって1822年に創立されたアジア協会 (Société Asiatique) の会員になる。この時代、日本学を発展させようという機運はまだなく、アジア協会が柱としていた以下のような信条を、ロニーと、そして彼に続

く次の世代の日本学者たちも、日本語教育の上での指標とした。

- 文法の教科書と辞書を作成する
- 世界中の専門家らと共同編纂する
- ヨーロッパに存在する写本を収集、複写する
- 研究者に彼らの研究を発表する場を与える
- アジアに関する研究を民間に普及する

1862年3月、最初の日本人外交使節団がパリに来る時、公式な通訳として立ち会うことになっていたロニーは、シーボルトの弟子であるジョゼフ・ホフマン (Joseph Hoffmann, 1805-1878) を随行させた。この人物は、ライデン大学で、ヨーロッパでの最初の日本語教師となった人物であり、17、18世紀の日本仏教美術の重要な図像の宝庫である『仏像図彙』をヨーロッパに紹介した人であった。この書物はエミール・ギメがのちに自分のコレクションのために参考することになる。スタニスラス・ジュリアン、シーボルト、ホフマンの3人は、ロニーが1856年の彼の最初の著作、『日本語学習のための序論 (*Introduction à l'étude de la langue japonaise*)』の序文に書いているように、彼の日本語研究の進展に大きな影響を及ぼした。しかしここで忘れてはいけないのは、ロニーが日本語の学習と教育のみに限らず、19世紀後半の著名な博学者たちの普遍主義的な傾向をもつ多角的なアプローチを取り入れ、日本の文化、宗教をも理解しようと、その文献学的知識から絶えず汲み取り続け、またそれらに関する著作もいくつか残しているということである。

フランスへ最初の日本人使節団が来た後、彼らのパリ滞在に際して協力したレオン・ド・ロニーへの感謝として、1863年5月5日に、帝国東洋言語学校で日本語の無料の公開講座が開かれた。最初の日本語講座開講から5年たった1868年5月24日、フランス政府は、明治維新の

後、日本の政治的状況が変化していることを受けて、早速帝国東洋言語学校に日本語科を設け、ロニーにこれを任せた。

1872年、明治時代に入って初めての使節団が日本政府によってアメリカとヨーロッパに派遣された時、ロニーは“日本と西洋の学術協力”を確立するため、アメリカ、ヨーロッパ、日本の知識人の中からメンバーを募り、パリで最初の国際東洋学会議 (Congrès international des Orientalistes) の開催準備に取りかかる。そして、30人ほどの日本人がメンバーに名を列ね、日本使節団が帰った数日後の1873年9月1日、ソルボンヌ大学において最初の会議が開催される。同じ年、会議の後に、日本、中国、タートル、インドネシア研究学会が立ち上げられ、1859年にロニーによって設立された民俗誌学研究会と共に、世界中の最も著名な蒐集家、学者、日本学者、日本文化研究者をメンバーに有することになる。

今日の国立東洋言語文化研究所 (Institut National des Langues et Civilisations Orientales) の日本語・日本文化研究の創始者として、また、世界中の研究者の間の真のネットワークを築いた人物として、ロニーが残したものは、フランスにおける日本学の起源を探るうえで、非常に重要なものとなっている。こうした創始的な仕事により、モーリス・クーラン (Maurice Cou rant)、ノエル・ペリ (Noël Péri)、ジョゼフ・ドートルメル (Joseph Dautremer)、シャルル・ハーゲナウアー (Charles Haguenaue r) やルネ・ジーファー (René Sieffert)、ベルナル・フランク (Bernard Frank)、ジャン＝ジャック・オリガス (Jean-Jacques Origas) そして現在の彼らの大勢の弟子、教師、研究者、作家などが中心となって、フランスにおける日本学が発展したのである。こうした人たちは、新しい方法的アプローチを発展させ、日本語の受講者を年々増やしてきた。フランスでは20年ほど前か

ら、日本語、日本文化を教える学校や大学で学ぶ学生の数は急増している。国立東洋言語学校以外でも、パリ大学ジュススキ校、ストラスブール、レンヌ、ボルドー、トゥールーズの大学などで、日本語・日本文化学科が大きく発達してきている。そして、1990年、日本研究学会から派生したフランス日本研究学会（SFEJ）も忘れてはならない。この学会は、多分野にわたって研究や出版を奨励し、国際シンポジウムを定期的で開催している。

### C. エミール・ギメと宗教博物館

レオン・ド・ロニーがフランスに最初に導入した日本語の知識が、日本美術史の進展に大きく寄与したように、現在世界でもっとも重要な東洋美術の美術館となっているエミール・ギメの博物館の創設は、美術品との直接の接触を可能にしたという点で、この分野の発展の重要な礎であるといえる。

リヨン近郊の工場で生産される人工ウルトラマリンの開発者の息子として、エミール・ギメは24歳にして父親の仕事を引き継ぐように言われる。家業の中心人物として、彼は革新的な方法で、実家の工場を発展させることに成功する。そして、尾本圭子氏、フランシス・マクワン氏が著書『日本の開国 ―エミール・ギメ、あるフランス人の見た明治―』の中でも特筆しているように、工場労働者の育成や、彼らの精神生活に対する配慮は、古い文化への関心を向ける、大きなきっかけとなるのだが、ギメはそのことについて1904年に次のように語っている。

「私は毎日接している労働者達に対する関心から、人類の偉大な思想家達との接触を夢中になって求めた。同時に、彼らの道徳に関する理念について学んだことを、私の周りにいる人々の役に立てたいと思うよう

になった。したがって、文字になったり、あるいはものの形になっている資料を求める私の熱情には、より差し迫った、目に見える目的、少しでも幸福の種を蒔きたいという願望からくる、非常な興奮がありました。」

旅人、蒐集家、美術館創設者としての彼の才能は、1865年、その時代の流行だったエジプト旅行がきっかけとなって開花する。

美術品蒐集を始めたギメは、すぐさま数々の人類学や考古学の国際会議に出席し、アジア協会の会員になる。彼は、1870年代の知識人たちが、見たこともない国で調査を進めていることに気づき、美術館創立25周年記念の際、次のように述べている。

「私が深く関心をもってきたような、古い文明、あるいは異国の文明を真に理解しようとするならば、自らの信仰を白紙にし、教育や環境によって与えられたあらゆる固定観念を捨て去らなければならない。孔子の教えをよく捉えるには、中国文人の精神をもつことが肝要であり、仏陀を理解するには仏教的な魂をもたねばならない。書籍や収集品のみを通じて、その境地に達することが果たして可能であろうか。その時代や風土、風俗や民族を理解し得たとしても、そのみでは不十分である。その地に赴いて、信仰している人にじかに接すること、その人と話をする、その人がどの様に行動するかを知ることが、不可欠なのである。」

こうして、日本に1回も足を踏み入れることなく、日本に関するかなり理論的知識を発展させたロニーとは違い、ギメはこの国についての知識を深め、日本に赴く。1876年のフィラデル

フィア万国博覧会を訪れた後、そこで旅の道づれとなる画家、フェリックス・レガメー (Félix Régamey) と落ち合い、横浜へ向けてサンフランシスコを出航する。

ギメは文部省から、日本、中国、インドにおいて、極東地域の宗教を調べるようにという、1876年4月10日付けの告知文を携えていた。この文書は、彼の旅行に公的な役割を与え、彼にとって非常に好都合であった。日本滞在はギメにとって、人生における決定的な期間であり、1878年と1880年に出版された全2巻の著書、『日本散策 (*Les promenades japonaises*)』に、旅の印象が綴られている。

旅行は計9週間しか続かなかったが、大臣に宛てた報告書の中で、彼は「300以上の日本仏教美術絵画、600の仏像、1000巻以上の書籍からなるコレクション」を集めたと言っており、この旅行は見事な成果があったといえる。そして同じ報告書の中で、「相当な量の情報を私は手に入れたので、関心のある全ての人に使用していただけるようにしたいと思います」と述べている。

1878年の万国博覧会の際、日本から持ち帰った美術作品の一部を、ギメは『極東の宗教』という名のついた展示室で紹介する。予想を超える成功に勇気づけられ、ギメは世界中の宗教へ捧げるリヨンの博物館の建設を早々と完成させ、1879年に文部大臣によって開館される。しかし1882年に、他の主要な学校の近くに身を置こうと、パリへ美術館を移動させることに決める。1889年11月、パリで万国博覧会の閉会のセレモニーが行われていたとき、インド、中国、日本、エジプト、ギリシャ、ローマ帝国のすべての神々に捧げられたパリ・ギメ美術館が、共和国大統領によって開かれた。

この美術館は美術品のための美術館ではなく、また中国興味 (シノアズリ) や日本趣味 (ジャポネズリ) が流行した時代の異国趣味の

コレクションのひとつでもない、「思想の研究所」である、というギメの有名な言葉がよく引用される。世界の宗教、文明についての研究と考察の中心ともいえるこの美術館の、建物のちょうど中央に位置する、美術品展示の場と同じくらい重要な役割を担っている図書館は、その数年後、オリエンタリズム関連でもっとも優れた図書館のひとつとなるのである。

“哲学の工場”と形容したこの場所で、ギメは出版と翻訳に関する壮大な方針を打ち出す。まず『ギメ美術館年報 (*Annales du Musée Guimet*)』を創刊し、1914年には31のタイトルを数えている。またそのほかにも、『入門叢書 (*La Bibliothèque de vulgarisation*)』(1914年には40巻)のようなコレクションも加わり、その時代のもっとも著名な東洋研究者たちが、現在まで再版を重ね、参考図書として利用されているこうした出版物に貢献している。ギメはまた1880年に、現在でも続いている『宗教史学報 (*Revue de l'Histoire des Religions*)』を創刊する。そして彼はまた、その時代の著名な専門家を招いて無料の公開講座を定期的に催し、日本語教育にも力を注いだ。

1914年から始まった戦争は、ギメ美術館の活動を縮小させる。しかし、戦争が始まる前にギメはすでに、時勢が変わりつつあることを察知していた。古代の宗教は、次第に美術館の中で居場所を失い、ついには消え、一方国家はエチエンヌ・エモニエ (Etienne Aymonier) の使節団が持ち帰ったクメール美術の傑作を、早々にギメ美術館へと移した。19世紀末から20世紀初頭までの間に、シャルル・ヴァラ (Charles Varat) が持ち帰った韓国の蒐集品、ジャック・バコ (Jacques Bacot) がもたらした、300以上にのぼるチベット美術の品々、エドワール・シャヴァンヌ (Édouard Chavannes) やポール・ペリオ (Paul Pelliot) の中央アジアや中国での発見物などは、次第に改革をもたらし、新しい

方面、とりわけ中国学において特性を伸ばし、美術館は少しずつアジアの巨大文明の歴史を中心に扱うようになる。

今日、とくに日本美術という観点から見て、ギメ博物館は何を遺産として残し、何を継承しているだろうか。宗教とそれを描く美術作品に捧げられた、何よりもまず図像に関する最初の構想から、ギメ博物館は確かに大きく進化してきた。それは、考古学的発見の過程で、東洋全体の美術へと対象を広げていったということである。しかし同時に、ギメ美術館は、その創設者の思想、資産を守り、それを引き継いでいる。今日でもなお、ギメ美術館は単なる美術品の展示場ではなく、東洋美術の研究や遺跡発掘を助成することを目指しており、美術館の中で重要な位置を占める図書館や、雑誌『アジア美術 (Arts Asiatiques)』、またフランス極東学院 (Ecole Française d'Extrême-Orient) や国立学術研究センター (CNRS)、高等研究実習院 (Ecole Pratique des Hautes Etudes)、コレージュ・ド・フランス (Collège de France)、ソルボンヌ大学 (Université de la Sorbonne) のいくつかの学科などの多くの提携研究機関は、エミール・ギメという偉大な先駆者の活力から生まれたこうした分野が、今日でもなお発展し続けるための場となっている。

そして、このことは非常に重要なことであるが、エミール・ギメが優遇した図像学的、また民族誌学的な性格をもったテーマは、特に彼の最も重要な遺産である日本学という分野において、確かに存続しているといえる。大学の学科としての日本美術史は、最初に述べたような中国やインドの美術史、考古学史などと比較すると、今日まだそれほど重要視されていないが、仏教史、思想史、写本の研究、仏教経典や図像学的文献の研究は、19世紀末から絶えず発展しており、フランスにおける日本学を世界でも最も重要なものとしているのである。

エミール・ギメの重要な後継者として、ベルナル・フランクをあげられる。残念ながら最近他界したが、その思想と仕事は、フランスだけでなく国外でも、現代の日本学者たちに大きな影響を与え続けている。文学作品の翻訳、仏教図や日本の思想についての著作や講演に加え、その壮大な仕事の完成として、今日“パンテオン・ブディック” (Panthéon bouddhique) と呼ばれる、ギメが持ち帰った仏像のコレクションの一部を集めた、美術館の別館の有名な場所の創設を発案したのは、ベルナル・フランクであった。

もう少し後の時代、多くは江戸時代や明治時代のものだが、これらの作品はベルナル・フランクが発見するまで倉庫に追いやられていたが、彼は数年間綿密な分類作業に専念した後、それらを再びよみがえらせることを決意したのだった。また、こうした入念な作業によって、とりわけ、エミール・ギメにとって日本での美術品蒐集のための一番の参考資料であった『仏像図彙』の、根本的な役割を証明することになった。この“パンテオン・ブディック”という新しい展示室は1991年に開かれ、数々の展示品の中でもとりわけ、エミール・ギメが1世紀前に注文していた、東寺の立体曼荼羅のレプリカ、そして1232年に制作され法隆寺金堂に保存されている、阿弥陀三尊に属する勢至菩薩像を見ることができるようになった。

#### D. ルイ・ゴンズと日本美術史

エミール・ギメによって1世紀以上前にその構想を与えられた国立東洋美術館 (Musée National des Arts Asiatiques) は、世界の宗教を広め、研究し、比較するという総合的な計画のもとに生まれたものであった。こうした広く豊かな視野において美術作品は、その美しさゆえに鑑賞されていたとしても、まず何よりも宗教的なテキストの挿絵のように認識されていた。ギ



メの仕事は、日本学全体の発展にとって重要なものであり、今見てきたようにそのことはフランスにおいて、イコノグラフィーや古い文献の研究に向けて、知識人たちの多くの才能を開花させたが、日本美術史の研究には、必ずしも同じような飛躍をもたらさなかった。

しかしここで、ルイ・ゴンズという、歴史学者であり美術愛好家、批評家である人物が、1883年に『日本美術 (*L'art japonais*)』というタイトルの本を出版し、フランスを西洋において、日本美術史研究の先駆者たらしめた。ジャポニズムが開花した1870年から1910年の間に、欧米では、約30冊ほど、日本美術史の分野に直接結びつく重要な著作が出版された。その中でも、とりわけ3つの著作が、日本に対するイメージの進化に転機をもたらしたようである。それは、ルイ・ゴンズの『日本美術』、1900年の万博の1年後に出版された『日本美術史 (*l'histoire de l'art du Japon*)』(仏語訳はエマニュエル・トロンコワによる)、そしてアメリカ人アーネスト・フェノロサ (Ernest Fenollosa) が1912年に執筆した『中国・日本美術の時代 (*Epochs of Chinese and Japanese Art*)』である。

18世紀よりフランスでは、好奇心の強い人々の間や貴族の家では、しばしばオランダやシャムを通して運ばれる、貴重な日本の品々を集めることが習慣となっていた。マリー・アントワネットの日本製漆器や、領主たちの家を飾る日本や中国の陶器などは、周知の通りである。こういった、日本の芸術作品を異国趣味や装飾の目的に限定する風潮とは一線を画し、また19世紀半ばから流行していた旅行記、あるいは民族誌学的、文学的書物とは違い、ルイ・ゴンズの著書は、蒐集家の先入観を反映しながらも、日本の芸術作品を知らしめ研究させるための、真の美術史であった。著名な美術商であり、1900年のパリ万博の委員長であった林忠正という人物の協力があつたように、当時の日本とフラン

スの間の実り多い協力関係があつたからこそ、ゴンズの著書は多くの日本の文献を支えることができたわけだが、その原点は何よりも文献ではなく作品そのものであつたということは、この著書の中に使われている、現代の20のコレクションに属する763の日本の作品の見事な複製がはっきり現している。ちなみに、そのうち3分の1は彼自身のコレクションのものであつた。周知の通り、日本の美術作品の美的価値への評価は、この時代、知識ある美術品愛好家の強力なサークル、ゴッホやモネ、ゾラといった芸術家や作家、また、ジョルジュ・クレマンソーといった実業家、政治家などによって共有されていた。こうして1883年、ゴンズは日本美術の大きな回顧展を開き、開会の言葉として、その場にいた著名な美術商であり、月刊誌『芸術的日本 (*Le Japon Artistique*)』の発行者であるジークフィールド・ピンク、銀行家であり芸術家のパトロンであるイサック、ニッシム・ド・カモンド (Isaac et Nissim de Camondo)、あるいは日本美術の著名な批評家テオドール・デュレといった、数々のフランス人蒐集家に対する感謝の意を表した。

確かに、こうした絵に付随する解釈は、今日批評の目にさらされるとしても、フランソワ・ゴンズ氏が1997年に大叔父の偉業に捧げた論文の中で強調しているように、解釈はそのコンテクストに戻してみなければならない。つまり、アメリカ人アーネスト・フェノロサのように、日本美術と大陸からの影響の結びつき、及び中世時代の仏教美術作品における芸術的価値の重要性を的確に指摘した人物とは違い、ゴンズは、日本美術の“日本性”というものを評価し続けた人物であつた。フランス人に初めて緒方雪舟、尾形光琳、北斎、河鍋暁斎の作品を紹介したゴンズは、それらを何よりも「純粋な」日本美術の例として描き、否定的に見られていた中国の影響から解き放した。こうした日本美術の解釈

に見られる民族主義的な傾向は、1871年ドイツとの戦争に破れた直後の、弱体化したフランスにおいて、ゴンズが芸術家たちに、自分を取り戻し、「フランス人として、フランスの芸術を生み出す」よう励ましたという事から、理解することも可能である。明治期の大きな変動のただ中にある日本に敏感に反応し、またフランスの状況と比較し、ゴンズは何よりもまず日本のアイデンティティーを探し求めたのだろう。そういった意味で、世界的な国際協調の中、自らの力を強固にしようとしていた日本人の目的に、彼は完璧に合致していた訳である。

ゴンズの仕事において、19世紀末のフランスという背景に生まれた要素のひとつとして、ネオ・ゴシックの建築家として有名なヴィオレール・デュック (Viollet-le-Duc) によって推奨された機能主義の理論が挙げられる。パリ古文書学校でヨーロッパ中世美術を学んでいた時に、この理論を知ったゴンズは、形と装飾の完全な一致を示す、日本とヨーロッパの例の比較を、しばしば導入しようとした。

イポリット・テーヌ (Hippolyte Taine) のような歴史決定論の哲学者もまた、ゴンズの解釈に大きく影響を及ぼしたと考えられる。彼によると、フランスの封建社会が創造力に適した理想的な環境を構成していたように、彼が著書の中で挙げた日本の美術作品は、何よりも、調和のとれた機能的な日本の社会の証なのである。テーヌが宣言したように、全ての芸術的な創造物は、歴史の流れから直接的に産み落とされたものとして、そこには描かれているのである。

民族主義、機能主義、決定論といった思想が、『日本美術』の著者であり、著名な蒐集家でもあったゴンズにおそらく影響を与えたと考えることができるわけだが、20世紀に入るとこうした思想に対する異論が巻き起こる。1900年パリ万博での日本帝国議会による『日本美術史』の発行は、現在も使われている新しい歴史区分に

よって、それまでヨーロッパにおいて実際にはほとんど知られていなかった日本美術の全貌を初めてフランスの 대중に明かし、実際、日本文化研究に関する最初の書物群にある問題提起を引き起こすのである。日本の考古学的、仏教的遺産の古さ、重要さを俄かに実感した知識人や蒐集家たちは、徐々に江戸時代の作品から遠ざかり、もっと古い時代に関心を向け始め、20世紀初頭から中国や中央アジアで始まった考古学的、仏教的な遺跡発掘地の発見や科学的探検旅行に、次第に情熱を傾けていった。いずれにせよ、ゴンズの著書は、単に西洋における最初の日本美術史に関する書物のひとつであるだけでなく、日本人にとっても、自分達の芸術的遺産を認識し評価するための、重要なよりどころとなったのである。

ところで先にも触れたが、フランスでは、例えばアメリカとは違って、その後の時代にそれほど日本美術の研究が根付かなかったが、ではいったいそれはどのように説明できるだろうか。確かに、浮世絵によって特にヨーロッパで高く評価された日本美術との出会いから、フランス人の芸術家たちは新しい芸術を生み出し、その影響は現代のクリエイターたちの創造力をたえず刺激し続けている。作家、美術批評家、思想家や建築家たちもまた、数十年前から日本的な芸術表現に対し、強い関心、あるいは情熱さえも見せている。

しかし、アカデミーや大学の環境に関しては、例えば過去1世紀の間に『アジア美術 (Art Asiatique)』や『ギメ美術館年報 (Les Annales du Musée Guimet)』に載せられた記事のタイトルを検索すれば、この分野へ貢献が少ないことに気付く。残念ながら最近他界した東洋言語学校の古代美術史の教授、フランソワ・ベルティエ氏 (François Berthier) のような例外を除けば、ごく最近まで日本学者たちは他の分野に広く関心を向けていた。ちなみにギメ美術館に勤務し

ていた筆者も、日本美術史についての真の教育を受けたいという強い願いから、5年前に来日して東北大学で仏教絵画を研究した。

この発表で何度も触れたように、東洋学者たちの豊かな伝統と、エミール・ギメが創設した宗教美術館の重要性は、事実多くの学者にとって、まず何より古い文献、思想、宗教の研究に基づいた日本学の流れに属するものである。他方、ギメ美術館は、ヨーロッパの他の美術館と同様に、日本の古い時代の美術作品はそれほど多くは所蔵していない。仏像に関しては特に、美術館の日本部門は非常に美しい、古い時代の作品を有しており、中には奈良時代にまで遡るものもあるが、大部分は19世紀の著名な蒐集家や日本美術の愛好家のもたらした、主に浮世絵、漆器、陶器など、彼らの寛大な寄付によるものである。そのため美術史家は一般に、江戸時代の作品の研究に向かい、古い時代の美術の研究はなおざりにされるのである。

美術史研究という、言語の研究などと比べると非常にまだ若いこの分野は、日本でも西洋でもこの数十年に大きな変化をとげている。フランスや一般にヨーロッパでは、それまでほとんど未知だった絵やオブジェの大量の流入による日本美術の発見ののち、アビ・ヴァールブルク (Aby Warburg)、アーウィン・パノフスキー (Erwin Panofsky)、エルネスト・ゴンブリッチ (Ernest Gombrich)、アンドレ・チャステル (André Chastel)、といった人物によって、「美術史」というものが徐々に見直され、作品の質、内在する意味の分析、そして作品の文化的背景全体の理解が、文献研究と同じように重要となる「美術史」の確立のために、新しい方法を提案し始めたのである。

## まとめ

フランスにおける日本学の豊かさとダイナミズム、そして、ひとつの分野として成り立つようになった美術史という分野の躍進は、フランスに日本美術史家の新しい世代を生み出しつつある。フランスの研究者の総合的精神と、日本美術に触れた時に生じる彼らの好奇心は、日本の研究者の厳格さ、緻密さと、今日見事に調和するものである。19世紀末にギメが宗教博物館を設立したとき、彼は貴重な協力者たちに恵まれていた。のちに東京芸術学校 (現在東京芸術大学) の今泉雄作、民法典を作成した3人の有名な編者の一人、富井政章、1889年に東京帝国博物館の館長であった九鬼隆一らである。同様に、『日本美術史』の仏語訳者であるエマニュエル・トロンコワも、その日本文化に関する深い知識は、日本での長期滞在、岡倉天心のもとで知り合った同時代の日本の芸術家との出会いに大きく負っている。そして、ルイ・ゴンズ、エドモン・ド・ゴンクールもまた、林忠正の援助と助言がなければ、今日ヨーロッパの美術館に所蔵されている数々のコレクションを蒐集することはできなかったであろうし、日本美術に関する最初の書物も著せなかったであろう。確かに、時代の流れの中で目的や方法論は進化するものである。日本はルイ・ゴンズの時代に、西洋との接触によってその美術史を紡ぎ始め、今日、東洋だけでなく西洋美術についての多くの優れた出版物、シンポジウム、展示会が示すように、世界的にも先端に位置している。今日こうした分野に貢献しようとする外国人にとって、この仕事は大変困難ではあるが、文化や視点を相互に補うことで、刺激的なアプローチを保ち続けられることを信じている。

また、時代が変わっても、こうした異文化の出会いの果実は、常に予測不可能である。例えば、広重や北斎の浮世絵が19世紀末の数年間で

世界の芸術に革命をもたらすと、誰が予想できたであろうか。さて、アンドレ・マルローが言うところの『空想美術館』には、まだ空いている空間がある。『富嶽三十六景』はヨーロッパ人の目に親しいものであるが、平安時代の絵画などはほとんど未知のままなのである。とりわけ美術史のような分野の発展のためには、美術作品や作者との直接的な接触、同時代の専門家同士の国際的な出会いの場や協力関係は、何にも増して重要なのである。

お茶の水女子大学が今、「日本学」という分野での国際交流を目指した研究センターを設立するという事は、したがって将来的に非常に実り多いものとなり、この大学のこうした試みは、美術史にとっても必然的なものだと考える次第である。

#### 主要な参考文献、典拠

エミール・ギメの引用はすべて以下の文献からの抜粋による：

- 尾本圭子著、フランシス・マクワン著『日本の開国 エミール・ギメ あるフランス人の見た明治』創元社発行1996年
- フランスにおける東洋研究の誕生と発展に関して：
  - 『Deux siècles d'histoire à l'Ecole des Langues Orientales』, Paris, 1995年
- レオン・ド・ロズニーに関して：
  - レオン・ド・ロズニー 著作『La civilisation japonaise』Ernest Leroux 出版社 Paris, 1883年
  - 堀口 良一著『Les missions bouddhiques et Léon de Rosny』『Cipango』第4号, 1995年／『レオン・ド・ロズニーの日本仏教に対する関心—島地黙雷との出会いを中心に—』『政治経済史学』342, 343, 1995年
  - 松原秀一著：[Léon de Rosny et Fukuzawa Yukichi] 『L'Ethnographie』LXXXVI, 2, 1990年／[フランス東洋学とレオン・ド・ロズニー：福沢諭吉との関連に於いて]『福沢手帳』第2号, 1974年／[レオン・ド・ロズニー略伝]『近代日本研究』, 第3号, 1986年
  - Suzanne Esmein 著 [Une bibliothèque japonaise au XIXème siècle: celle de Léon de Rosny] 『Nouvelles de l'Estampe』第85号 1986年3月／『La bibliothèque japonaise de Léon de Rosny』Lille, Biblio-

thèque municipale de Lille 1994年

- Luc Chailieu 著, [Léon de Rosny et la connaissance du Japon en France], 1990年, [L'Ethnographie], LXXXVI, 2, 1990年

エミール・ギメに関して：

エミール・ギメ著、フェリックス・レガメー画：

- 『1876ボンジュールかながわ』、青木啓輪訳、有隣堂、1977年／『ギメ東京日光散策、レガメー日本素描紀行』画青木啓輪訳、雄松堂、1983年
- 尾本圭子著、フランシス・マクワン著『日本の開国 エミール・ギメ あるフランス人の見た明治』創元社発行1996年
- Francis Macouin 著：[Emile Guimet, champion de l'orientalisme], [Historia] 第655号, 2001年,
- Françoise Chappuis 著 Francis Macouin 著：『D'Outremer et d'Orient mystique... les itinéraires d'Emile Guimet.』Suilly-la-Tour：Findakly 出版社, 2001年
- 尾本圭子著、[ギメとレガメーの日本旅行 (1876年)]『ジャポニズムの時代、19世紀後半の日本とフランス、第二回日本研究日仏会議』日仏美術学会, 1983年

- 『Ages et visages de l'Asie: un siècle d'exploration à travers les collections du musée Guimet.』出版社 Dijon：Musée des Beaux-Arts, 1996年

ルイ・ゴンズに関して：

- ジャポニズムの系譜第2回配本ルイ・ゴンズ著「日本美術」全2巻+解説冊子『L'Art Japonais par Louis Gonse』解説：馬淵明子氏 Synapse 出版社、2003年（原本：Albert Quantin 出版社、1883年）
- François Gonse 著 [Une histoire de l'art japonais en 1883—L'oeil de Louis Gonse—] 『Histoire de l'Art-Extrême-Orient』40/41, 1998年
- 馬淵明子著「1900年パリ万国博覧会と Histoire de l'art du Japon をめぐって」『今、日本の美術史学をふりかえる』東京国立文化財研究所 文化財の保存に関する国際研究会平成11年

ベルナール・フランクとフランスにおける日本学に関して：

- 『日本仏教曼荼羅』Bernard Frank (原著), 仏蘭久淳子 (翻訳) 出版社：藤原書店2002年／『方忌みと方違え—平安時代の方角禁忌に関する研究』斎藤広信 (翻訳) 岩波書店1989年／[L'intérêt pour les religions japonaises dans la France du XIXème siècle et les collections d'Emile Guimet] (十九世紀フランスにおける日本宗教への関心とエミール・ギメのコレクション) [L'âge du japonisme: la France et le Japon dans la deuxième moitié du XIXe siècle] Société Franco-Japonaise d'Art et d'Archéologie, Tôkyô, 1983年／『Le panthéon bouddhique, Collections japonaises

- d'Emile Guimet] (ギメ美術館バンテオン・ブ  
 ディック・ギャラリーカタログ) RMN 出版社、  
 1991年
- 19世紀後半から発達したフランスにおける美術史研  
 究の誕生に関して
- Christophe Marquet 著 [Emmanuel Tronquois (1855  
 -1918) Un Pionnier des études de l'art japonais]  
 『Ebisu Etudes japonaises』第29号2002年
  - Véronique Béranger 著 [Les recueils illustrés de Lieux  
 célèbres (*meisho zue*) La collection d'Auguste Lesouëf  
 (1829-1906)] 『Ebisu Etudes japonaises』第29号  
 2002年
  - 『Ebisu Etudes japonaises』Hiver1998年 [Henri Cer-  
 nuschi (1821-1896) homme politique, financier et  
 collectionneur d'art asiatique]
  - 『Correspondance adressée à Hayashi Tadamasu 林忠  
 正宛書簡集』東京文化財研究所=編 国書刊行会  
 2001年
  - Brigitte Koyama-Richard 著 『Japon révélé Edmond de  
 Goncourt et Hayashi Tadamasu』Hermann Editeurs des  
 Sciences et des Arts 出版社 2001年

**フランスにおいて日本学研究を行っている主要な学  
 校、研究センター、大学の学部**

- フランス国立東洋言語文化研究所 Institut National  
 des Langues et Civilisations Orientales (INALCO)
- フランス国立極東学院 Ecole française d'Extrême-  
 Orient (EFEO)
- 高等研究実習院—宗教学部門— Section des Sci-  
 ences Religieuses Sorbonne (EPHE)
- 仏国立社会科学高等研究院 Ecole des Hautes  
 Etudes en Sciences Sociales (EHESS)
- コレージュ・ド・フランス Collège de France
- フランス国立科学研究センター Centre National

- pour la recherche scientifique (CNRS)
- フランス日本研究学会 Société Française des Etudes  
 Japonaises (SFEJ)
  - ソルボンヌ大学(パリ第4大学)極東研究所 Cen-  
 tre de recherche sur l'Extrême-Orient Paris Sorbonne  
 (CREOPS)
  - フランス東洋国立ギメ美術館 Musée National des  
 Arts Asiatiques-Guimet
  - 日仏会館 (東京) La Maison Franco-japonaise (MFJ)
  - パリ第7大学ジュスキユ校 Université Paris VII Jus-  
 sieu
  - トゥールーズ大学 Université de Toulouse Le Mirail
  - ストラスブール第2大学 Université des Sciences  
 Humaines de Strasbourg II (Marc Bloch) Centre  
 d'Etudes Japonaises d'Alsace-CEJA
  - リヨン第3大学 Université Jean Moulin-Lyon III
  - ボルドー第3大学: Université de Bordeaux III
  - グルノブル第3大学: Université Stendhal-Grenoble  
 III
  - エクサン・プロヴァンス第1大学: Université  
 d'Aix-Marseille I
  - クレルモン・フェラン第2大学: Université Blaise  
 Pascal-Clermont II
  - レンヌ第2大学: Université de Rennes II
  - ル・アーブル大学: Institut des Langues et Civilisa-  
 tions Orientales-Université du Havre